

猿かに合戦

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、猿とかにがありました。

ある日猿とかにはお天気がいいので、連れだつて遊びに出ました。その途中、山道で猿は柿の種を拾いました。またしばらく行くと、川のそばでかにはおむすびを拾いました。かには、

「こんないいものを拾つた。」

と言つて猿に見せると、猿も、

「わたしだつてこんないいものを拾つた。」

と言つて、柿の種を見せました。けれど猿はほんとうはおむすびがほしくつてならないものですから、かには向かつて、

「どうだ、この柿の種と取りかえつこをしないか。」

と言いました。

「でもおむすびの方が大きいじゃないか。」

とかには言いました。

「でも柿の種は、まけば芽が出て木になって、おいしい実がなるよ。」
と猿は言いました。そう言われるとかにも種がほしくなって、

「それもそうだなあ。」

と言いながら、とうとう大きなおむすびと、小さな柿の種とを取りかえてしまいました。
猿はうまくかにをだましておむすびをもらうと、見せびらかしながらうまそうにむしやむしや食べて、

「さようなら、かにさん、ごちそうさま。」

と言つて、のそのそ自分のうちへ帰つていきました。

二

かには柿の種をさつそくお庭にまきました。そして、

「早く芽を出せ、柿の種。」

出さぬと、はさみでちよん切るぞ。」

と言いました。すると間もなく、かわいらしい芽がによきんと出ました。かにはその芽に向かつて毎日、

「早く木になれ、柿の芽よ。」

ならぬと、はさみでちよん切るぞ。」

と言いました。すると柿の芽はずんずんのびて、大きな木になって、枝が出て、葉が茂つて、やがて花が咲きました。

かにはこんどはその木に向かつて毎日、

「早く実がなれ、柿の木よ。」

ならぬと、はさみでちよん切るぞ。」

と言いました。すると間もなく柿の木にはたくさん実がなつて、ずんずん赤くなりまして。それを下からかには見上げて、

「うまそうだなあ。早く一つ食べてみたい。」

といつて、手をのびしましたが、背がひくくつてとどきません。こんどは木の上に登ろうとしましたが、横ばいですからいくら登つても登つても落ちてしまいます。とうとうかにもあきらめて、それでも毎日、くやしそうに下からながめていました。

するとある日猿が来て、鈴なりになっている柿を見上げてよだれをたらしめました。そしてこんなりにりっぱな実がなるなら、おむすびと取りかえっこをするのではなかったと思いましたが。それを見てかには、

「猿さん、ながめていないで、登って取ってくれないか。お礼には柿を少し上げるよ。」
と言いました。猿は、

「しめた。」

と言わないばかりの顔をして、

「よしよし、取って上げるから待つておいで。」

と言いながら、するする木の上に登っていききました。そして枝と枝との間にゆっくり腰をかけて、まず一つ、うまさうな赤い柿をもちで、わざと、「どうもおいしい柿だ。」と言いいい、むしやむしや食べはじめました。かにはうらやましそうに下でながめていました、

「おい、おい、自分ばかり食べないで、早くここへもほうっておくれよ。」

と言いますと、猿は、「よし、よし。」と言いながら、わざと青い柿をもちでほうり出しました。かにはあわてて拾って食べてみますと、それはしぶくって口がまがりそうでした。

た。かにが、

「これこれ、こんなしぶいのはだめだよ。もつとあまいのをおくれよ。」

と言いますと、猿は「よし、よし。」と言いながら、もつと青いのもいで、ほうりました。かにが、

「こんどもやつぱりしぶくつてだめだ。ほんとうにあまいのをおくれよ。」

と言いますと、猿はうるさそうに、

「よし、そんならこれをやる。」

と言いながら、いちばん青い硬いのもいで、あおむいて待つているかんの頭をめがけて力いっばい投げつけますと、かにには、「あつ。」と言ったなり、ひどく甲羅をうたれて、目をまわして、死んでしまいました。猿は、「ざまをみる。」と言いながら、こんどこそあまい柿を一人じめにして、おなかのやぶれるほどたくさん食べて、その上両手にかかえきれないほど持つて、あとをも見ずにどんどん逃げて行ってしまいました。

猿が行ってしまったあとへ、そのときちようど裏の小川へ友だちと遊びに行っていた子が帰って来ました。見ると柿の木の下に親がにが甲羅をくだかれて死んでいます。子にはびつくりしておいおい泣き出しました。泣きながら、「いったいだれがこんなひど

「いことをしたのだろう。」と思つてよく見ますと、さつきまであれほどみごとになつていた柿かきがきれいになくなつて、青い青いしぶ柿かきばかりが残のこつていました。

「じゃあ、猿ざるのやつが殺ころして、柿かきを取とつていつたのだな。」

とかにはくやしがつて、またおいおい泣なき出だしました。

するとそこへ栗くりがぼんとはねて来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣なくの。」

と聞ききました。子こがには、猿ざるが親おやがにを殺ころしたから、かたきを討うちたいと言いいますと、

栗くりは、

「にくい猿ざるだ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣なきでない。」

と言いいました。

それでも子こがには泣ないていますと、こんどは蜂はちがぶんとうなつて来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣なくの。」

と聞ききました。

子こがには猿ざるが親おやがにを殺ころしたから、かたきを討うちたいと言いいました。すると蜂はちも、

「にくい猿ざるだ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣なきでない。」

と言いました。

それでも子がにがまだ泣いていますと、こんどは昆布がのろのろすべって来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

と聞きました。

子には猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると昆布も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣きでない。」

と言いました。

それでも子がにがまだ泣いていますと、こんどは白がころころがって来て、

「かにさん、かにさん、なぜ泣くの。」

と聞きました。

子には猿が親がにを殺したから、かたきを討ちたいと言いました。すると白も、

「にくい猿だ。よしよし、おじさんがかたきをとつてやるから、お泣きでない。」

と言いました。

子にはこれですっかり泣きやみました。栗と蜂と昆布と白とは、みんなよって、かた

き討ちの相談をはじめました。

三

相談がやつとまとまると、臼と昆布と蜂と栗は、子がにを連れて猿のうちへ出かけて行きました。猿はたと柿を食べて、おなかがかくちくなくなつて、おなかこなしに山へでも遊びに行つたとみえて、うちにはいませんでした。

「ちようどいい。この間にみんなのうちの中にかくれて待っていていよう。」
と臼が言いますと、みんなはさんせいして、いちばんに栗が、

「わたしはここにかくれよう。」

と言つて、炉の灰の中にもぐり込みました。

「わたしはここだよ。」

と言いながら、蜂は水がめの陰にかくれました。

「わたしはここさ。」

と、昆布は敷居の上に長々と寝そべりました。

「じゃあ、わたしはここに乗つていよう。」

と白は言つて、かもいの上にはい上がりました。
 夕方になつて、猿はくたびれて、外から帰つて来ました。そして炬ばたにどっかり座り込んで、

「ああ、のどが渴いた。」

と言いながら、いきなりやかんに手をかけますと、灰の中にかくれていた栗がぼんとはね出して、とび上がつて、猿の鼻面を力まかせにけつかけました。

「あついで。」

と猿はさけんであわてて鼻面をおさえて、台所へかけ出しました。そしてやけどをひやそうと思つて、水がめの上に顔を出しますと、陰から蜂がぶんととび出して、猿の目の上をいやというほど刺しました。

「いたい。」

と猿はさけんで、またあわてておもてへ逃げ出しました。逃げ出すひょうしに、敷居の上に寝ていた昆布でつるりとすべつて、腹んばいに倒れました。その上に白が、どきりところげ落ちて、うんとこしよと重しになつてしまいました。

猿は赤い顔をありつたけ赤くして苦しがつて、うんうんうなりながら、手足をばたばた

やっています。

そのとき、お庭にわの隅すみから子こがにがちよろちよろはい出だしてきて、

「親おやのかたき、覚おぼえたか。」

と言いいながら、はさみをふり上あげて、猿さるの首くびをちよきんとはさみではさんでしまいた。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

猿かに合戦

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>